

## 津 山 尚：早田文蔵先生のタイ国及び旧仮領印度支那旅行

Takasi TUYAMA: The late Prof. Bunzo Hayata's botanical journey to Indochina and Thailand

台湾の植物の研究を軌道にのせられた早田文蔵先生は更に目を東南アジアの熱帯に向けられた。先生は1917年5月台灣総督府の援助を受けて、単身香港を経てハイポンに上陸し、タムダオ山を越え、トンキン地方南部を過ぎて中国の国境に出て、鉄道で雲南まで行つて引き返され同年8月帰朝された。次に第2回の旅行も同じく総督府の援助の下に1921年5月に出発されて、サイゴンに上陸し、ランピアン高原を採集し、サイゴンから一度タイ国領に入り、雨期のため種々辛苦をなめながら、メコン川の上流のラオス領に入り、この川を下りつつ採集され、翌年3月に帰朝された。この2回の旅行期間は1年2カ月に及び、採集標本は約1万点、今この標本は東京大学理学部に保存されている。この標本は伊藤洋氏及び小生が先生の没後、大体の大分け整理をした。なおMerrill氏によればパリー博物館に先生の標本が775点保存されていると言う。

この旅行を通じて先生は例の有名な動的分類系のヒントを得られたのであるが、旅行の詳細は知られていない。小生ら先生の教授としての末期に授業をうけた学生は植物分類学の時間にげんとうに写し出された仮印旅行談を聽講した訳であるが、暗幕をたれた暗い教室では誰もノートをとることができずに、貴重なお話は自然忘れ去られてしまつた。わずかに南洋協会雑誌10巻10~11号に「仮領印度支那を観察して」と言う先生の講演の簡単な速記録が残つてゐるばかりである。この旅行で採集された材料をもとにして、先生は次の諸論文を発表されている。

Some conifers from Tonkin and Yunnan (植雜 31, 1917) — Sur le Xun-Peh-Muh, nouvelle espèce de *Podocarpus* du Tonkin, de concert avec quelques notes sur le Peh-Muh (Bull. econ. Indo-Chine 1917) — むかしりうびんだい属及びプロトマラッチア属に就キテ (植雜 32, 1918) — 再び *Marrtia*, *Protomarattia*, *Archangiopteris*, *Angiopteris* ノ諸属相互の関係ニ就キテ (植雜 33, 1919) — プロトマラッチア属ノ記載 (同上) — *Protomarattia*, a new genus of Marattiaceae and *Archangiopteris* (Bot. Gaz. 67, 1919)

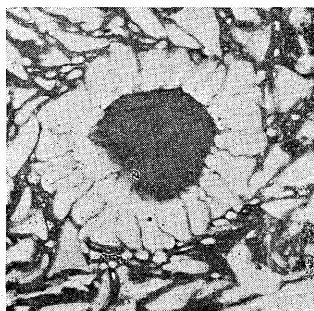
小生は1957—58年にタイ国及びラオスを採集したがその時、タイ国北部の中心都市 Chiang Mai で、大きい写真館を経営しておられる田中盛之助氏に会い、小生も色々お世話になつたのであるが、氏から直接現地における先生の思い出の一端を聞くことができた。氏は既に80才をこえた老令であるが、記憶力はたしかであり、壯者をしのぐ健康の主である。鹿児島県人であつて、よい意味の明治の愛國者の姿をまのあたりに見るような方である。以下の文章は忙がしい旅行中に氏から聞き出し得た小話をつづつしたものであつて、文責は全部小生にある。田中氏は先生の印象を生のままに語つて下さつた。

内容の一部は先生に対して印刷して公表するのは失礼ではないかとも思つたが、氏自身も先生を尊敬しておられるのは小生等と同様であり、数々のエピソードから、先生の旅行中の真面目の一端でも伝えられればこれに勝る率はないと思うに至つた。

『早田先生は Saigon から Bangkok に上陸された(註 1921 年 7 月頃)。Saigon で眼をわざらわれたのであるが、当地の医者が梅毒性であると言つたので大いに怒られて謝罪状を取つたと話された。Saigon からは三井物産の鈴木重光氏が案内して参り、Bangkok では一流の Oriental Hotel に入られた。そこから北上して Lampang に見えた時、停車場まで出迎えに来てはじめて先生にお会した。一寸したチップにも 1 バーツも出されるので、ひやひやして見ていたが、未だ初見なので遠慮してだまつていた。Lampang では一番よい旅館の二階に入られ、3—4 日間滞在され、ここまで同行して来たハノイ大学の Lagrange 教授と同居しておられた。しかし教授は先生の奇行(?)にあいそをつかして分れて帰国してしまつた。教授は先生と性格が似た人で、気性の強い方であつたという。ここから一日行程で Chiang Mai に入られ、私の経営する田中写真館にそのまま 20 日間滞在された。その中に私の紹介でこの地の総督ボーワラディ殿下の別荘に入られることになつた。この別荘は市の西方にそびえる Doi Suteep の中腹にあつて、大変涼しく、山は高さ約 1270 m、植物に富み、中腹には有名な大寺院がある。時は雨期の最中で、連日の雨であるが、先生は一心に植物の研究に打ち込まれ、他のことには一切とんちやくされなかつた。食事は毎日漬物のみと言う精進ぶりで、お付のボーイが私の所に逃げ出してうつたえたこともあつた。先生は寝台大の標本乾燥器をもつておられ、木炭を用いておられたが、木炭が足りなくなると、「田中、木炭を持って来い」と言われた。その他万事下男あつかいにされて全く弱つてしまつた。先生は早く Laos 領にお入りになりたくて、私を責められたが、私は雨期の旅行は道路も破壊しているし、病気も多くて危険であると、何とか雨期明けを待つように御忠告していた。ある時仏人の宣教師が Chiang Mai にやって来て、先生に雨期中の旅行も可能だと言つたので、「田中は自分をだました」と大いに怒られたこともあつた。ここで滞在 2~3 カ月の中に漸く雨期も終りに近づき(註 10 月頃)、北東部にある国境に近い町 Chiang Rai に向かって馬で 15—20 日間位の旅に出発された。出発前 10 日間位は再び私の所に滞在した。この旅行には学校出で英語のわかるインド人を 1 人つけたが、この人は Laos 入国が許可されず、先生は旅先で随分苦労されたらしい。出発前にも骨と皮のようにやせておられた。先生はフランス語は達者であったが、現地の言葉は勿論わからないし英・仏語を話せるタイ国人はこの地方には当時はいなかつた。後に頂いた手紙によつて Chiang Khong から国境を越えて Mekong 川の対岸 Laos 領の Houei Sai に入られ、更に東方の Luang Prabang に行かれたことを知つた。Chiang Mai までここから約 240 km ある。ここから先生は Mekong 川を舟で下りながら各地で採集され、再び Saigon に帰着された。当時 Mekong 川を下つたのは日本人としては初めてで、後に私自身で

下つたのが二度目であると云う。後に私が Luang Prabang の知事(仏人)に会つた時に「先生があまりお氣の毒に見えたので、小使をつけて Saigon まで送らせた」とのことを見た。先生は Saigon から私あてに 300 バーツを送金して来られたが、この額は私が先生のために立てかえておいたお金には遙かに及ばなかつた。先生の御手紙には「若し送金が余分であつたら子供さんに何か買つてくれ」と書いてあつた。先生にはお金の値打は全然判らないように見えた。私は日本へ帰国された後も先生と文通をし、また人の評判を聞いて、先生が思つていたより遙かにえらい方であることを知つた。』(広島の旅舎にて記す)

○ミカズキモのピレノイドの構造 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Electronmicroscopic figure of pyrenoid in *Closterium*) 緑藻類其他の藻類から一部のコケ類にまで葉緑体中に存在するピレノイドについては従来 2通りの考え方がある。Timberlake (1901) がアミミドロ (*Hydrodictyon reticulatum*) を使ってえた知見では、その一部がたえず分離し、分離した部分が澱粉粒に変つて行くとした。多くの学者がこの説をとつているが、山内 (1913) は同属の他種 *H. africanum* (1913) で pyrenoid とでん粉は無関係とのべ Bold (1933) は蛋白質系の pyrenoid から澱粉粒のできることの無理をのべてゐる。Czurda (1928) はアオミドロ (*Spirogyra*) を使い、結局澱粉は葉緑体の本体から作られるが、pyrenoid の外側に層をなして沈積するのだという Schmitz (1882) のもとの説を再認した。ところで、この表紙カットは神谷平氏がミカズキモ (*Closterium sp.*) の細胞膜の構造を電子顕微鏡で研究中に副産物として撮影された写真を好意で提供されたのであるが、ミカズキモは *Spirogyra* とは近縁であるから、上の論争の解決に役立つであろうと思う。中心の黒いところは central protein body 又は Czurda が pyrenocrystal という部分で蛋白質から成るとされている。その廻りの菊花の弁の部分が恐らく starch envelope に当るであろう。なお左下部で central protein body がへこみ、菊花紋が二重弁にみえるところは、前者がちぢんでなれたために生じた変形で、腔室は菓子の鹿の子の小豆のように一皮だけ並んで作られているとみてよい。この部分は更にその外側の黒い波模様の葉緑体の主体部と共に明らかな構成物であることがわかる。従つて Schmitz-Czurda 説の方が妥當であろう。ただ重要なことにこの多数の腔室 (?) 中に澱粉がどの様にたまるのか、また腔室は何で出来ているのかが今後解明を要する問題である。終りにこの写真を提供された神谷平氏に感謝する。



写真は電子顕微鏡で 1000 倍にうつしたもの引きのばして約 3800 倍になっている。